

僕たちにできること

師勝中学校三年 藪下 聡吾

みなさんが大切にしているものは何ですか。家族ですか。友達ですか。きっと人それぞれだと思います。しかし、七十四年前の八月六日、午前八時十五分。広島に投下された一つの原子爆弾によってたくさんのお大切なものが奪われたのです。

僕たちは、平和の使者として八月五日と六日に広島に行きました。そこには市電が走っていたり、たくさんの人で賑わう商店街があったりして、とても原子爆弾が投下されたとは思えないほどきれいな町並みがありました。

しかし、一九四五年の八月六日に投下された原子爆弾によって広島一帯が火の海と化しました。荒れ果てた大地。ごみのように積み重ねられたたくさんのお死体。いつもの生活ががらりと変わってしまったのです。被害はこれだけにとどまらず、原子爆弾の影響で発生した放射線によっていろいろな影響を受けて、苦しみながら死んでいった人もいました。僕はこの話を聞いたとき、とても驚いたのと同時に悲しい気持ちになりました。また、生き残った人々の中にも原子爆弾によって障害をもってしまった、他の地域などから差別されたり、厄介者にされたりしたそうです。自分たちが落としたわけではないのに、今の僕たちには想像できないほど辛い日々を多くの広島の人々は過ごしました。

戦争によって大切なものをたくさん奪われた広島の人々。彼らから何もかも奪っていった核兵器は、この世界にまだたくさん存在しています。再び核兵器が使用されれば、またたくさんのお大切なものを失うことになります。だからこそ、彼らの「もう二度と同じ過ちを繰り返してほしくない」という強い意志を受け継いで、核兵器根絶を世界に呼びかけていかなければならないと思います。確かに、僕たちが呼びかけたところで、すぐに世界は変わらないかもしれません。しかし、唯一の被爆国である日本が呼びかければ、その声は世界へと広がり、いずれはこの世から核兵器がなくなるのではないかと思えます。

私たちが今の平和な暮らしができてるのは、辛い歴史を乗り越えてきたからです。しかし、これは決して当たり前なことではありません。世界では今もまだ戦争が起きています。原爆ドームではたくさんのお外国の方を目にしました。僕たちだけではなく世界の人々も平和を願っているのだと分かりました。

今回の訪問を終えて、世界が平和であってほしいと改めて強く思いました。世界で唯一の被爆国である日本。その脅威と恐怖を世界へ伝えられるのは、僕たちだけです。僕たち次の世代がこの悲惨な出来事を忘れず、後世へと伝えていく。その使命を僕たちは担っています。行動しましょう。世界が今よりも平和になることを信じて・・・。

一九四五年八月六日

西春中学校三年 石原 海琴

あの日、広島街を今まで見たことのないほどの強い光が覆いました。その光は、一瞬で広島に住む人々の何もかもを奪い去りました。街のあちらこちらに、皮膚を垂れ下げて歩く人。「助けて、助けて。」と崩れた瓦礫の下から助けを求める声。原爆ドームのすぐ横を流れる元安川には、多くの死体が悲惨な姿で波にゆられながら浮かんでいました。無数の人々が起こったのかも分からないまま命を落としました。普段と変わらぬ朝を迎えた広島風景が、地上六百メートルで炸裂した原子爆弾という化学兵器によって、広島の人々の人生を変えてしまったのです。

今回、私は平和の使者として広島を訪れました。七十四年前のあの日、何が起こったのか、何が失われてしまったのか、戦争の実態を学ぶため平和記念資料館を見学しました。そこには、多くの展示品が「あの日」のままの状態に残されていました。被爆者の遺品である焼きちぎれた服や熱さで変形した三輪車、全身大火傷を負った人々の写真、我が子を守るようにしてうずくまったままの母親の絵、そこにある全てのものが被爆の悲惨さを物語っていました。私は、これらを見て言葉を失いました。そのときの衝撃は、今も心の奥に残っています。この思いを戦争を知らない私たちの世代や、これから生まれてくる人たち、そして、世界中の人たちに伝えていかなければならないと強く思いました。

原子爆弾の破壊力は、一時的なものではありません。核から発せられる放射線を浴びてしまった人たちは、日がたつてからも身体中に死の斑点ができたり、白血病を発症したりしました。今でも、後遺症に苦しんでいる人たちは、たくさんいます。核は恐ろしい破壊力で人々に害を与え、命、家族、友人、そして、未来までも消滅させました。

人間は争いに勝つために核兵器を発明しました。未だ世界には、約一万四千発以上の核兵器が存在します。もし、七十四年前のように、大切な家族や友人が核の犠牲になったなら、私は絶対に許すことができません。当時広島でごく普通に暮らしていた人々も同じ気持ちだったことでしょう。

「ありがとうやごめんねの言葉で認め合い許し合うこと、寄り添い、助け合うこと、相手を知り、理解しようと努力すること。」これは、平和記念式典で平和の誓いとして読まれた言葉です。世界恒久平和と聞くと、どこか難しく聞こえるかもしれませんが、私たち一人一人が互いを尊重し合うことで平和な世界への第一歩に繋がっていくのです。今もなお、戦争で大勢の人が亡くなったり、苦しんだりしています。核兵器を持つことが自国を守り、平和を築くのでは決してありません。核兵器の廃絶こそが平和への道を開くのです。

広島で起きた過ちは、二度と繰り返してはならない、誰もがそう願っています。今を生きて、そして未来を生きる私たちが、広島や長崎の悲劇を伝えていかなければなりません。今回の経験を、一人でも多くの友達に伝えられるよう、私自身も努めていきたいと思いません。

「ノーモア ヒロシマ。」

この美しい地球をいつまでも、永遠に。

戦争と平和

白木中学校三年 藤尾 孝太郎

僕は先日、平和の使者として広島を訪れた。そこは多くの人が行き交い、路面電車も走っているなど、とても活気のある素晴らしい町だった。しかし、一九四五年八月六日。全てが失われた。そう、たった一つの「原子爆弾」によって。

僕は平和記念資料館や原爆ドームなどを見学した。展示されている物全てが原爆の恐ろしさを物語る。例えば、原爆の熱線で、顔の皮が剥がれてしまった人の写真。眼球が飛び出た亡骸。ゴミのように捨てられたたぐさんの骨。石段に焼きついた人の影。「死の斑点」が体に出来た人の写真。原爆が落とされた八時十五分を永遠に指し続ける時計。罪の無い人々がたった一つの原爆によって「生き地獄」へと突き落とされた。考えるだけで慄ましい事だ。

更に僕は、被爆体験伝承者による伝承講話でお話を聞き、当時の悲惨さを知ることができた。

中二で被爆した國重昌弘さん。目の前で死んでしまった同級生の弟を目にし、涙が溢れたという。今も八月六日に平和記念式典を終えた後に慰霊碑の前に立ち何度も「ごめんね。ごめんね。」と謝っているという。核兵器は、ただたぐさんの死者を出すだけでなく、今もなお被爆者を肉体的、精神的に苦しめる「あつてはならない武器」だ。

しかし、そんな武器が世界にはまだ、一万四千発以上も存在している。更に核兵器廃絶を目的とし、アメリカとロシアで結ばれていた中距離核戦力（INF）全廃条約が失効した。世界での核兵器廃絶の流れは逆行している。このような中、我々にはあの日あの時の惨禍を二度と繰り返さぬように、次の世代、また次の世代へと永遠に語り継ぐ責務がある。時がたち、被爆者の方も少なくなつた。時代の流れに伴い、人々の「戦争の悲惨さの記憶」は次第に風化している。「八月六日、九日」を忘れてはならない。

今回訪れた広島。そこで見たもの、聞いたもの。その全てが「戦争の悲惨さ」と「平和の尊さ」を訴えかけていた。今度は、自分達の番だ。戦争のない状態を「平和」と言うが核戦争の危機に直面している現在を本当に「平和」と言っても良いのだろうか。僕は、今回の広島で学んだ「核の恐ろしさ」、「戦争の悲惨さ」を一人でも多くの人に伝えていこうと思う。それが、「平和」の意味を知る手掛かりになるかもしれないから。

「平和への思い」

訓原中学校三年 吉安 春貴

「この広島には、今は緑がたくさんあり、平和な毎日が送られています。この下には広島県の被爆にあった人たちが埋まっています。」この言葉は、広島県知事が平和の式典で語った言葉です。みなさんは、これを聞いたとき、どう思うでしょうか。

一九四五年、今から七十四年前、広島の人々はいつも通り平凡な日々を過ごしていました。しかし、あの一瞬の出来事で広島の人々の生活は一変しました。八月六日の朝、子どもたちがいつもと違う機種の飛行機が飛んでいると思った瞬間、キラキラしたものが落とされて、広島は地獄と化しました。辺りどこを見渡しても火の海で、以前は遊び場だった川は死体で埋めつくされてしまいました。戦争がどれだけ悲惨であったかを忘れてはいけないということを覚えてもらいました。

僕は今年、平和の使者として広島を訪問しました。今まで僕は戦争について、「怖いものだ」とか「戦争はしたくない」程度の関心しかありませんでした。しかし、今回の広島への派遣で多くのことを学び、戦争について明確な意識をもつことができました。また、戦争のことをたくさん教えていただいて、二度と戦争を起こしてはいけないと思いました。広島平和記念資料館の中では、被災者の方が描いた絵や、やけどで顔がまったく分からなくなってしまった写真や、三人の男の子の遺品を集めて作ったもの、男の子の三輪車などが展示されていて、その物全てがあの日起こった悲惨さを物語っているように見えました。

さらに僕たちは、被爆体験伝承者の方による講話を聴くことができました。原爆がどういった影響を及ぼしたかを具体的に説明していただき、とても怖いと思いました。その日その方は、原爆が投下されたところより少し遠い場所にいたため命は助かりましたが、投下後は、地獄絵図を見たと言っていました。

コンクリートが三千度を超え、生きたまま焼け死んだ人、建物に押しつぶされて亡くなった人、命は助かったものの顔の皮膚がはがれ落ちて頭の毛が抜けてしまった人などを間近で見ることになりました。また、自分自身も皮膚がはがれて大変なことになったそうです。そういった人のことを考えると、涙が出るくらい心が痛くなりました。

今、世界は核兵器を減らす運動が進められています。しかし、現実には核兵器を持っている国がたくさんあります。僕は被爆国の一人として、世界の核兵器が一個でも減るように願っています。

今回、平和の使者として広島に行き、命の尊さや一日一日の大切さに気付くことができました。今回学んだことを忘れず、平和な毎日を願い、学校生活を過ごしていきたいと思っています。

平和への想い

熊野中学校三年 水谷 碧泉

ヒロシマを知った。一九四五年八月六日、午前八時一五分。火傷ではがれた皮膚、爆風によって倒壊した建物のがれき、川や地面に積み上がった亡きがら。一回の原爆は、十四万人の命を奪ったのだ。そんな中、大切な人を失った悲しみと向き合い広島復興に力を注いだ人たちを私は知った。

初めに訪れた広島平和記念資料館では多くの悲惨な光景を目の当たりにした。最も印象に残った展示物は、焼けこげた子どもの衣服や三輪車であった。幼い子が家族と楽しく過ごし、健やかに成長していく未来も一瞬にして壊されたのだ。想像を絶する当時の様子に行き場のない悲しみで胸がしめつけられた。

資料館では被爆者二世の方から原爆投下の日の話を聞いた。多くの人々の命が奪われ、かろうじて生き残った人も体だけでなく心にも傷を残し、被爆者の方々は今もお苦しんでいることを知った。

原爆は爆発の瞬間、強烈な熱線と放射線が四方へ発せられると共に周囲に超高压の爆風が吹き被害を拡大させた。熱線による被害は皮膚が焼きつくされ、内臓までも傷害を受ける。爆心地から三・五キロ離れた所にいた人でさえ素肌の部分は火傷を負った。爆風によって木造家屋は倒壊し、鉄筋コンクリートで造られた建物さえも押しつぶされた。中でも爪跡を残した原爆ドームは被害の大きさを物語っていて、復興した現在でも原爆ドームだけは七十四年前から時が止まっていた。また放射線は体に深刻な障害を及ぼした。爆発直後の放射線で亡くなった人、外傷が全く無い無傷と思われた人々が被爆後月日が経過してから発病し亡くなった例も多くある。さらに原爆は長時間に渡って残留放射線を地上に残すため、家族や親戚、同僚を捜す人、救護活動のため被爆後に広島を訪れた人も直接被爆した人と同じように、発病して、亡くなった例も多くある。私が一番衝撃をうけたのはケロイドだ。火傷の跡の肉や皮膚が盛り上がり硬くなってしまいう症状が出る。ケロイドにより体の動きが制限される他、見た目も醜くなってしまいう症状が出る。背中や肩にできた人たちは肌を出すことをためらい夏でも長袖の服を着て過ごすようになってしまった。原爆に終わりはないのだ。

二日間、平和の使者として参加させていただいたことに感謝したい。原爆について聞いたり、見たり、実際に触れてみて、その残酷さに何度も涙があふれそうになった。今でも原爆は世界中で増え続けている。「絶対にあのようなことを後世の人たちに体験させてはならない。この苦痛は、もう私たちだけでよい。」という当時の人々の切実な想いを単なる願いで終わらせてよいのだろうか。唯一の被爆国に住む私たちだからこそ原爆の恐ろしさを世界中に発信していかなければならないと改めて思う。

平和の使者として

天神中学校三年 橋本 たまき

広島を訪れる前、私の中の原爆や戦争は、「過去のもの」でした。学校の教科書に載った白黒写真や、いつか読んだ戦争のお話。恐ろしいとは思いつつも、それらは自分に関係のない出来事だと思っていました。

実際に原爆ドームを見たときに、私は言葉を失いました。建物が一瞬にしてこんな姿になるなんて、嘘みたいだと思いました。また、広島平和記念資料館では、被爆前と被爆後の広島の写真や亡くなった方々の遺品、原爆の絵などを見ました。そこには、被爆し、一瞬のうちに亡くなった人、倒れた建物の下敷きになり、助けを求めながら死んでいく人、大火傷を負い、ボロボロの体で水を求めて歩く人の姿がありました。恐ろしくて、思わず目を背けたくなるようなものが、たくさんありました。

そんな中で、ある資料を見つけました。現在の、国ごとの核弾頭保有数を示した図です。その図には「ロシア・七千発、アメリカ・六千八百発」というように、核兵器を保有する九か国が示されていました。これを見たとき、私はようやく、現在も大量の核兵器が地球上に存在しているという現実を思い知らされました。以前にも同様の図をテレビで見た記憶があります。しかし、そのときはまだ核兵器の恐ろしさを知らなかったのです。「過去のもの」と思っていた原爆が、私たちの頭上に襲いかかる日がくるかもしれないという恐怖。この恐怖は、広島を訪れなければ感じることができなかつたと思います。私は、核兵器が世界から無くならないかぎり、平和な世界は実現しないということを、改めて感じました。

現在では、原爆の記憶を次の世代に引き継ぐための取り組みが行われています。その一つである被爆体験伝承講話を聞かせていただきました。被爆し、顔と腕の皮が剥がれ、何が起きたのかも分からぬまま仲間と歩いた、十四歳の少年のお話でした。彼は「お兄ちゃんを探しに来た。」と言って小屋へ入ってきた少年が亡くなるところを目の前で見たり、被爆した友達が亡くなったり、辛いことをたくさん経験したそうです。私は、自分と同じ年齢でそのような経験をした少年が、不憫でなりません。それと同時に、被爆者の方々「同じ苦しみをもう二度と繰り返して欲しくない」と願う気持ちが伝わってきました。

核兵器を廃絶することは、とても難しいことかもしれません。しかし、原爆による人々の死、被爆者の思いを無駄にはいけません。私は平和の使者の体験をして、そう強く思いました。この思いを忘れずに、これからも平和の使者として、自分にできることから平和を実現させていきたいと思っています。